

「女子6人だけの休日」

午前9時。ヨルファミリア本部。今日は珍しく、男性陣が全員外出していた。つまり——ヨル。まふい。レモン。あめちゃん。にゃんこ。なっち。女性陣6人だけである。大食堂の一角にあるソファの中央にはヨル。

その隣には当然のようにまふい。というか。近い。めちゃくちゃ近い。

「まふい」

「はい、ヨル」

「近くない？」

「そうでしょうか」

「肩くっついてるけど」

「問題ありません」



「私があるんだけど」

「では……」

まふいがほんの少し離れる。約3センチ。

「これで」

「ほぼ変わってないよ」

向かいのソファで、あめちゃんがその光景を眺めていた。

「いつもあんな感じなの？」

にゃんこが頷く。

「いつもあんな感じ」

なっちも見る。

「まふいさん、お姉様のこと本当に好きですね」

その瞬間、まふいが振り返る。

「当然です」



「聞こえてた！？」

レモンが笑う。

「まふいにヨル関連の話すると全部拾うよ」

「特殊能力みたいに言わないで」

ヨルが苦笑する。

「ヨルに関することですから」

「否定しないんだ……」

午前10時。

「暇だねえ」

あめちゃんがソファに寝転ぶ。

「何かする？」

にゃんこが尋ねる。



「女子しかいないし——」

レモンがニヤッとする。

「恋バナでもする？」

「おっ」

あめちゃんが起き上がる。

「いいね」

にゃんこも少し興味を示す。

「面白そう」

なっちだけ固まる。

「こ、恋バナ……？」

そして、全員の視線が——レモンへ。

「……………」

レモンが瞬きをする。



「なんで私？」

ヨルが即答する。

「いや、一番分かりやすいし」

「何が！？」

あめちゃん。

「トムカス」

にゃんこ。

「トムカス」

なっち。

「トムカスさん」

まふい。

「トムカスですね」

「ちょっと待って！！」



レモンの顔が赤くなる。

「別にまだそういう関係じゃないから！」

ヨルがニヤニヤする。

「“まだ”？」

「……………」

「今、“まだ”って言った？」

「言っていない！」

「言ったよね？」

「言っていない！！」

あめちゃんのにゃんこが顔を見合わせる。

「これは」

「かなり」

「違うってばあ！！」



午前11時。恋バナ尋問会は続いていた。

「で？」

ヨルが聞く。

「昨日トムカスと出かけたんでしょ？」

「……うん」

レモンがクッションを抱えている。

「どこ行ったの？」

あめちゃん。

「普通に買い物とか……」

「手は？」

にゃんこ。

「え？」



「手、繋いだ？」

「繋いでない！」

「じゃあ腕は？」

「組んでない！」

「告白は？」

「されてない！」

「キスは？」

「してない！！」

レモンが真っ赤になってクッションを投げる。にゃんこが華麗に回避。

「質問が急加速してるって！！」

なっちは完全に観客になっている。

「すごい……女子会ってこういう感じなんですね……」

「たぶん違うよ」



ヨルが言った。

「違うんですか？」

「少なくとも私も分からない」

「お姉様主催みたいになってますけど!？」

そのとき、レモンが反撃に出る。

「じゃあヨルはどうなの？」

「私？」

レモンがまふいを見る。全員も見る。まふいもヨルを見る。

「……………」

ヨル。

「なんでまふい見るの？」

あめちゃん。



「いや」

にゃんこ。

「ねえ？」

なっち。

「いつも一緒ですし……」

レモンが笑う。

「さっきからずっとくっついてるし」

ヨルが隣を見る。まふいがいる。近い。相変わらず近い。

「これは違うから」

「何が違うんですか？」

まふいが尋ねる。

「まふいまで参加しないで!？」

「私はヨルの相方です」



「うん」

「ヨルの隣にいるのは自然です」

「まあ……うん」

「これからもずっといます」

「……………」

一同。

「おお～」

「何その反応!？」

まふいだけ満足そうだった。

昼。6人で昼食を作ることになった。ヨルが冷蔵庫を開ける。

「何作ろっか」

「オムライス!」



あめちゃんが即答。

「賛成」

にゃんこ。

「私も！」

なっち。レモンも頂く。

「いいね」

まふいは――

「ヨルが食べたいもので」

「まふいにも意思を持ってほしい」

「ヨルと同じものを食べたいという意思があります」

「強いなあ……」

調理開始。あめちゃんとにゃんこが二人で具材を切る。

「玉ねぎお願い」



「はいはい」

「鶏肉こっち」

「切っとく」

「ケチャップ取って」

「はい」

テンポがいい。なっちが感心する。

「あめちゃんさんとにゃんこさんも連携すごいですね」

「相棒だからね！」

あめちゃんが笑う。にゃんこも少し得意げ。

「これくらいはね」

その横。

「ヨル、包丁は私が」

「大丈夫だよ」



「危険です」

「料理だよ？」

「ヨルの指に傷がつく可能性があります」

「まふい」

「はい」

「私、戦闘力トップだよ？」

「それとこれとは別です」

「過保護すぎるって！」

そして完成。6個のオムライスが並ぶ。ヨル。まふい。レモン。あめちゃん。にゃんこ。なっち。

「いただきまーす！」

全員で食べ始める。



「おいしい！」

なっちが嬉しそうに言う。

「結構うまくできたね」

レモンも満足そう。その横で、まふいはヨルを見ている。

「……何？」

「美味しいですか？」

「美味しいよ」

「良かったです」

「まふいも食べなよ」

「はい」

あめちゃんが小声でにゃんこに話す。

「保護者みたい」

にゃんこも小声。



「でも時々もっと重い」

「聞こえていますよ」

まふい。

「怖っ」

午後2時。食後。なっちがカードゲームを持ってきた。

「これやりません？」

「いいじゃん！」

あめちゃんが飛びつく。6人で開始。最初は平和だった。しかし、30分後。

「にゃんこおおお！！」

あめちゃんの絶叫。

「ふふっ」



「裏切ったなあ！！」

「勝負だから」

「相棒だろお！？」

「勝負の時は敵」

「覚えてろお！」

その隣。レモン。

「なっち、そのカード絶対持ってるでしょ」

「も、持ってませんよ？」

「目泳いでる」

「泳いでません！」

「じゃあ出して」

「嫌です！」

そして、ヨルとまふい。



「まふい」

「はい」

「そのカードちょうだい」

「どうぞ」

「いや普通に渡しちゃダメでしょ!？」

レモンが叫ぶ。

「勝負にならないから!」

「ヨルが欲しいと言いましたので」

「ゲームのルールよりヨル優先!？」

「当然です」

「強すぎる……」

結局。ゲームは崩壊した。



午後4時。6人でお菓子を食べながら映画を見る。ヨルの右にまふい。左にレモン。床にはあめちゃんとにゃんこ。なっちはクッションを抱えて座っている。映画は恋愛ものの主人公とヒロインが良い雰囲気になる。あめちゃん。

「おっ」

にゃんこ。

「来るね」

なっち。

「来ますね」

そして告白シーン。レモンが無言になる。全員がレモンを見る。

「……………」

「……………」

「……………」



「……………」

「……………」

レモンが気付く。

「映画見て！！」

ヨルが吹き出す。

「いや～、つい」

「なんで告白シーンのたびに私を見るの！？」

「トムカス思い出した？」

「思い出してない！」

「ほんと？」

「……………ちょっとだけ」

「おお～！」

「もうやだこの女子会！！」



午後6時。映画終了。いつの間にか、あめちゃんにはんこの肩にもたれて寝ていた。

「寝ちゃった」

にはんこが呟く。

「起こす？」

なっちが聞く。

「んー……このままでいいかな」

にはんこは動かない。ヨルが微笑む。

「仲良いね」

「相棒だから」

その横。まふいもヨルの肩へ頭を乗せる。

「……まふい？」



「私たちも相方です」

「対抗しなくていいから」

「対抗ではありません」

「じゃあなんで急に？」

「したかったので」

「……………」

ヨルは少し困った顔をしながらも、そのままにしておく。レモンがその光景を見る。

「なんだかんだ許すよね、ヨル」

「まあ、まふいだし」

その一言。まふいがほんの少し嬉しそうに笑った。

夜。男性陣が帰ってくる少し前。6人で大食堂を片付ける。



「今日は楽しかった！」

なっちが笑う。

「また女子会しようよ」

あめちゃん。

「賛成」

にゃんこ。レモンも頷く。

「次は恋バナ禁止ね」

ヨル。

「え～」

「特にヨル！」

「なんで私！？」

「一番楽しんでたから！」

まふいが静かに手を挙げる。



「では次回はヨルについて話しましょう」

「まふい！？」

あめちゃん。

「賛成！」

にゃんこ。

「面白そう」

なっち。

「私も聞きたいです！」

レモン。

「決定ね」

「ちょっと待って！？」

五人が笑う。ヨルだけ納得していない。そのとき玄関から男性陣の声が聞こえた。

「あ、帰ってきた」



レモンが立ち上がる。そして玄関が開く。最初に入ってきたのは——トムカス。

「ただい——」

レモンと目が合う。

「……………」

「……………」

昼間の恋バナが一瞬で脳内再生される。レモンの顔が真っ赤になる。

「お、おかえり！」

「……ただいま？」

トムカスが首を傾げる。背後の女性陣。ニヤニヤ。レモンが振り返る。

「絶対何も言わないでよ！？」

ヨル。



「何も？」

まふい。

「言いません」

あめちゃん。

「もちろん」

にゃんこ。

「何のことだろうね」

なっち。

「わ、私は何も知りません！」

「なっちが一番怪しい！！」

その日の夜。トムカスだけが最後まで、

「今日、女子組で何があったんだ……？」

と首を傾げていた。そしてレモンは——しばらくトムカスの顔をまともに見られなかった。

